The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（十三）
Author(s)	椛島, 雅弘
Citation	中国研究集刊. 2014, 59, p. 159-165
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58713
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　珠号（総五十九号）平成二十六年十二月　一五九―一六五頁

新出土資料関係文献提要（十三）

椛島雅弘

本提要は、『中国研究集刊』闕号（総五十八号）に掲載された「新出土資料関係文献提要（十二）」の続編である。今回は、中文研究書については、二〇一〇年から二〇一三年の間に刊行された書の中で未だ紹介していないものを、国内研究書については、二〇一四年に刊行されたものをそれぞれ取り上げた。以下、「研究書（中文書）」「研究書（和書）」の二つに分類して紹介する。

研究書（中文書）

『戦国秦漢簡帛叢考』（劉楽賢著、文物出版社、二〇一〇年十一月）

著者による新出土文献研究の成果を収めた書。「戦国楚墓竹簡字詞考釈」「戦国楚墓竹書初探」「戦国秦漢《日書》研究」「馬王堆漢墓帛書叢考」「漢簡叢考（上）」「漢簡叢考（下）」「相関問題研究」の計七部で構成される。

「戦国楚墓竹簡字詞考釈」では、郭店楚簡、上博楚簡、包山楚簡に見える文字・語句について筆者の解釈を述べる。「戦国楚墓竹書初探」では、郭店楚簡『六德』『性自命出』『窮達以時』や上博楚簡『魯邦大旱』の釈読や思想史的意義について論じる。「戦国秦漢《日書》研究」では、九店楚簡、睡虎地秦簡、孔家坡漢簡の『日書』についてそれぞれ考察する。

「馬王堆漢墓帛書叢考」では、馬王堆帛書の中でも、主に『式法』『老子』を考察対象としている。「漢簡叢考（上）」では、虎渓山漢簡『閻氏五勝』、張家山漢簡『蓋廬』等、陰陽及び数術に関係する文献を中心に取り上げ

て検討する。「漢簡叢考（下）」では、新出土資料関連の書籍の解説等を収録する。「相関問題研究」は、主に類似する二者を比較研究することによって、その差異を明らかにする。例えば「従出土文献看兵陰陽」では、新出土文献の中で、『漢書』芸文志でいう所の「数術略」に分類されるべき文献（『日書』、馬王堆漢墓帛書『五星占』『天文気象雑占』等）と「陰陽家」に分類されるべき文献（銀雀山漢簡『曹氏陰陽』、虎渓山漢簡『閻氏五勝』等）を提示し、両者の差異を明確にしている。

著者は、これまで『簡帛数術文献探論』（中国人民大学出版社、二〇〇三年）、『馬王堆天文書考釈』（中山大学出版社、二〇〇四年）を著しており、数術学を専門とする研究者である。本書においては、『日書』をはじめとする数術系の出土文献に関する論文を多く収録しているが、一方で戦国楚簡の字句解釈や思想的検討を行った論文も含まれており、その点で特徴的だといえる。

『当代中国簡帛学研究（1949―2009）』

（李均明等著、中国社会科学出版社、二〇一一年十二月）

一九四九年から二〇〇九年の間に発見された簡牘及び帛書について概述した書。「簡牘典籍」「簡牘文書」「帛書」の三部で構成される。

上編「簡牘典籍」では、簡牘の中でも「典籍」に分類されるものを紹介する。第一章は、信陽長台関楚簡から北京大学蔵西漢竹書（以下、北大漢簡と略記）に至るまでの簡牘典籍の概要を記す。第二章では、簡牘典籍の研究史、文字、符号、形制等について述べる。第三章では、「出土簡牘与隷変研究」「古書的弁偽与校勘」といった項目を立て、簡牘典籍が持つ研究史上の意義について解説する。

中編「簡牘文書」では、簡牘の中でも「文書」に分類されるものを紹介する。第一章では、望山楚簡・包山楚簡等、計八十三個の項目を立て、それぞれ概要を記す。第二章、第三章では、上編と同じように、簡牘文書の研究史、文字、符号、形制等の研究史上の意義について解説する。

下編「帛書」では、主に馬王堆帛書を紹介する。第一章では、まず帛書そのものについて概説し、第二章で馬王堆帛書に関する内容を述べる。そして第三章では、『周易』『老子』といった文献の先行研究をそれぞれ紹介する。

本書は、膨大な分量の簡牘について概述する一方で、

馬王堆帛書のみ一章を費やして、文献ごとに先行研究を挙げながら詳細に解説しており、その点が特徴的であるといえる。

『戦国楚簡研究』（黄人二著、上海古籍出版社、二〇一二年十一月）

著者による戦国楚簡研究（一部漢代帛書研究を含む）の成果を収録した書。「戦国楚簡文字釈読」「戦国楚簡、漢代帛書与伝世文献」「戦国楚簡与中国経学、先秦史、古書体式」の三部構成となっている。

「戦国楚簡文字釈読」では、上博楚簡『内礼』『昭王毀室』『昭王与龔之準』（原釈文では、「準」は「膞」）『鬼神之明』『姑成家父』『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』『景平王就鄭寿』（原釈文では『平王問鄭寿』）『慎子曰恭倹』『君人者何必安哉』及び、清華簡の第一分冊、第二分冊所収の文献の文字・語句解釈を行う。

「戦国楚簡、漢代帛書与伝世文献」では、新出土文献によって新たに得られた知見に基づき、伝世文献の文字や本文の解釈について再検討する。例えば、「従郭店簡《語叢四》之《荘子》引文論其内外雑篇之性質」では、郭店楚簡『語叢四』の「竊鉤者誅、竊邦者爲諸侯、諸侯之門、義士之存。」と、これに類似する『荘子』胠篋篇の文章とを用いて校勘作業を行っている。また、『語叢四』『荘子』の文献的性質についても検討している。

「戦国楚簡与中国経学、先秦史、古書体式」では、新出土文献研究のうち、主に経学に関連する論考を掲載する。例えば「清華簡《寶訓》通解」（「寶」は原釈文では「保」）では、『保訓』を通して先秦時代における道統説の成立について考察する。また「従上博五《競建内之》看《尚書》〝高宗肜日，越有雊雉〟句之古義與新解」では、儒家経典であり歴史書でもある『尚書』商書の「高宗肜日、越有雊雉。」の解釈を、上博楚簡『競建内之』や他文献を参照しながら推測する。また「古書旁行邪上考」では、伝世文献や新出土文献に見える「体式」の中でも、「旁行（いわゆる分欄筆写。分欄筆写とは、例えば二段組みの場合、上段右から上段左に筆写した後、下段右に戻って下段左に向かって筆写する方式のことを指す）」に注目する。

本書は、新出土文献の情報を用いて、伝世文献の文字・語句を再検討する点に特色が見える。

『**戦国秦漢簡牘叢考**』（福田哲之著、白雨田訳、花木蘭文化出版社、二〇一三年九月）

著者による新出土文献研究の成果を収めた書。「上博楚簡甲乙本的系譜研究」「上博楚簡文献学研究」「漢簡《蒼頡篇》新資料的研究」「思想史、文字書法研究」の計四部で構成される。

第一部「上博楚簡甲乙本的系譜研究」では、上博楚簡の中でも、異本（甲乙本）が存在する『君人者何必安哉』（第一章）、『凡物流形』（第二章）、『天子建州』（第三章）を取り上げ、主に書風という点から両本の関係を考察する。

第二部「上博楚簡文献学研究」では、文献学的見地から上博楚簡について考察する。第四章では、文字の字体を根拠に竹簡の所属や配列について検討する。例えば、『内礼』には配列未詳で分篇が保留された附簡一簡が存在するが、竹簡の字体を分析することにより、その竹簡が『季康子問於孔子』に属することを指摘する。第五章では、『孔子見季桓子』簡一や『平王問鄭寿』簡六と『平王与王子木』簡一の編聯問題について検討する。第六章では、『弟子問』中の孔子の呼称がすべて「子」であることから、『弟子問』は『論語』の編集において主要な位置を占めた、直弟子由来の原資料であることを推測する。

第三部「漢簡《蒼頡篇》新資料的研究」では、近年出土してその実態が明らかになった『蒼頡篇』について言及する。第七章では、水泉子漢簡『蒼頡篇』を取り上げ、『蒼頡篇』が『説文解字』以前の小学書においてどのような位置を占めていたのか明らかにする。第八章では、敦煌漢簡、居延漢簡、阜陽漢簡、水泉子漢簡、北大漢簡にそれぞれ含まれる『蒼頡篇』関連資料を用いて比較検討を行う。

第四部「思想史、文字書研究」では、思想史と文字書に関係する研究を収録する。第九章では、清華簡『尹誥』を取り上げ、『孟子』と比較することにより、『尹誥』の思想史的意義を明らかにする。第十章では、「氵」（さんずい）について、出土した戦国後期の銘文や上博楚簡の「氵」に注目して、「氵」の成立過程を探る。第十一章では、東牌楼東漢牘の情報を援用しつつ、「張芝の草書」の実態について検討する。

本書の大半は、日本で既発表のものをまとめて翻訳したものであり、文字学、文献学的視点から論じる研究が大半を占める点で特徴的であるといえる。

研究書（和書）

『竹簡学―中国古代思想の探究―』（湯浅邦弘著、大阪大学出版会、二〇一四年五月）

著者による新出土文献研究の成果を収めた書。具体的には、上博楚簡、清華簡、岳麓秦簡、北大漢簡所収の文献を主な考察対象としている。「儒家思想と古聖王の伝承」「王者の記録と教戒―楚王故事研究―」「新出秦簡・漢簡に見る思想史」の三部で構成される。また、冒頭に「竹簡学用語解説」を、末尾には「書評　陳偉等著『楚地出土戦国簡冊〔十四種〕』」を附す。

まず「竹簡学用語解説」では、新出土資料を扱う上で抑えるべき用語を解説する。「簡牘」「簡帛」といった基本用語のみならず、近年注目されている「劃痕」「編号」についても項目を立てて解説している。

第一部「儒家思想と古聖王の伝承」では、主に儒家思想に関係する新出土文献を取り上げる。まず序章では、出土した竹簡を紹介し、それらの竹簡が中国古代思想史研究上、どのような意義を持つのかについて言及する。第一章では、上博楚簡『季康子問於孔子』『君子為礼』『弟子問』を手がかりに、儒家思想における重要単語の一つである「君子」について考察する。第二章では、上博楚簡『顔淵問於孔子』を取り上げ、顔淵の人物像、儒家集団と俸禄・仕官、儒家系文献の形成といった点について考察する。第三章では、上博楚簡『挙治王天下』を取り上げ、「堯舜禹」といった古聖王の系譜の型について検討する。第四章では、清華簡『程寤』を取り上げて、その主題と思想史的意義について考察する。

第二部「王者の記録と教戒―楚王故事研究―」では、上博楚簡に含まれる楚王故事の中でも、『荘王既成』『申公臣霊王』『平王与王子木』『平王問鄭寿』『昭王毀室』『君人者何必安哉』を取り上げ、計六章にわたって考察する。そしてこれらの文献は、楚の王、太子、貴族等を主な読者対象とし、それらを教戒するために編纂された可能性を指摘する。

第三部「新出秦簡・漢簡に見る思想史」では、近年発見・発表された竹簡の中で、岳麓秦簡『占夢書』、銀雀山漢簡「論政論兵之類」、北大漢簡『老子』について考察する。まず序章では、北大漢簡の概要を述べる。第一章では、岳麓秦簡『占夢書』を取り上げ、主に敦煌本『新集周公解夢書』、『日書』と比較検討し、その思想史的意義を探る。第二章では、銀雀山漢簡「論政論兵之

類」全五十篇の中で、ひとまとまりの文献であることが推定されている十二篇に注目し、その時代性や兵学思想史上の特質を検討する。第三章では、「論政論兵之類」のうち、興軍の時節について述べる「起師」と、将軍の持つべき資質について述べる「将義」を取り上げ、それぞれの特質を明らかにする。第四章では、「論政論兵之類」中の「客主人分」「奇正」を取り上げ、その思想的特質について考察する。第五章では、北大漢簡『老子』の「道経」「徳経」の前後関係や、他本との語句の異同を手がかりに、北大漢簡『老子』の文章的特質、思想的特質を明らかにする。

本書は、『竹簡学』と題するように、木簡学に比べて一般認知度は低いが、中国古代思想史を明らかにする上で重要な「竹簡学」についての研究書であり、近年陸続と発見されている竹簡の最新研究成果を、広範囲にわたって把握できる。また、初学者向けに専門用語や竹簡学の概要解説がなされており、さらに著者による竹簡の実見報告を載せる点に特徴があるといえる。

『地下からの贈り物　新出土資料が語るいにしえの中国』（中国出土資料学会編、東方選書、二〇一四年六月）

新出土資料について解説した書。主に初学者を対象としており、全二章、四十六節（加えてコラム一節）を立ててそれぞれ分担解説する。

第一章「出土資料でわかること」では、「暦」「家族」「食事」「貨幣」「諸子百家」「戦争」「文字」「医学」等、多様なテーマを掲げ、墓、青銅器、簡牘、帛書、画像石といった出土資料から、新たにどのようなことが判明したのか、それぞれ平易に語る。

第二章「どこから出てきたか」では、出土地ごとに項目を立て、そこからどのような資料が出土したのか紹介し、新たに判明した事柄を述べる。

本書の特徴として、普段あまり取り上げられることのないテーマや出土物に対しても、項目を立てて解説する点が挙げられる。例えば、「中国古代のボードゲーム」（第一章第二十五節）では、「六博」という双六のようなゲームを取り上げている。また「長安と固原」（第二章第二十節）では、長安から出土した南北朝～隋唐期の墓誌石について、井真成墓誌だけでなく、ソグド人墓誌や

百済遺民祢氏一族墓誌についても紹介する。
本書は、これまでの出土資料研究を包括的に捉えた初の概説書という点で注目される。

『戦国秦漢出土術数文献の基礎的研究』（大野裕司著、北海道大学出版会、二〇一四年六月）

新出土文献の中でも、特に術数に関わる文献を対象とした研究書。「解題篇」「論文篇」の二部で構成される。
第一部「解題篇」では、出土術数文献を天文、歴譜、五行、蓍亀、雑占、形法の六つに分類し、そのうち歴譜以外の五つの分類に属する文献についてそれぞれ解説する。
第二部「論文篇」では、計四章で構成される。第一章「睡虎地秦簡『日書』における神霊と時の禁忌」では、主に神霊によるタブー（禁忌）という観点から、睡虎地秦簡『日書』におけるタブーの観念を明らかにする。また、睡虎地秦簡『日書』の神霊によるタブーの独自性の背景について考察する。第二章「中国古代の神煞」では、神霊の一つである「神煞」について、伝世文献及び各地から出土した『日書』の記述を手がかりとして考察する。著者によれば、これまで神煞は、日の「吉」と「凶」両方を支配する神（つまり神煞は、「吉神」と「凶煞」の二つの性質を有する）として捉えられていたが、戦国秦漢時代の出土術数文献に見える神煞は、吉神としての神煞が全く存在しない。ここから、「吉神」と「凶煞」という区分は、後世の人が「吉神」としての神煞を作り出した後できたものであることを指摘する。そしてこのような神煞観の変化は、『日書』等に見える「術数的天道観」の存在が密接に関係していることを述べる。
第三章「『日書』における禹歩と五画地の出行儀式」では、主に『日書』に記載されている禹歩五画地法（出行の凶日にどうしても出行しなければならない時に行う儀式の一つ）を検討し、秦代の禹歩五画地法から南宋以降の速用縦横法への変遷を追っていく。第四章「玉女反閉局法について」では、『太白陰経』に見える最古の玉女反閉局法（禹歩五画地法と類似する儀式）や、『武経総要』『太上六壬明鑑符陰経』『景祐遁甲符応経』の玉女反閉局法について、校勘と解説を行う。
本書は、出土術数文献の中でも、特に『日書』に注目する点や、膨大な数に上る出土術数文献を分類して、それぞれ解説を加えている（「暦譜」類の文献は除く）点で特徴的であるといえる。